【日本漢詩】

富士山

石川 丈山

作者

石川丈山

天正十一（一五八三）年～寛文十二（一六七二）年。江戸時代初期の漢詩人。名は重之（しげゆき）、号は丈山・詩仙堂。三河国碧海郡泉村（愛知県安城市和泉町）の代々徳川家に仕える家に生まれた。慶長三（一五九八）年より家康の侍臣として武勲に励んだが、慶長二十（一六一五）年、大坂夏の陣において先陣を切ったことが軍令違反に問われたのを機に、武門を去って妙心寺に入って禅を修め、また近世儒学の祖とされる藤原惺窩（一五六一年～一六一九年）に入門した。一時は浅野家に仕官したものの、寛永十二（一六三五）年より京都に住み、詩作に興じた。寛永十四（一六三七）年には堀川松原の本国寺で朝鮮通信使の権侙と筆談を交わし、自作の詩二百余篇を献じたところ「日東の李杜」との評を得て、詩を唱和した。その後、洛北一乗寺村に隠棲し、狩野探幽に、漢から宋までの詩人三十六人の肖像を描かせ、これを壁間に掲げて詩仙堂と号した。詩仙堂では、林羅山、堀杏庵、元政上人など当時の著名な文人らともっぱら詩文の交わりを楽しみ、寛文十二（一六七二）年五月にその生涯を閉じた。著書に漢詩集の「覆醤集（ふしょうしゅう）」があり、没後に改めて編纂された全集「新編覆醤集」がある。

主題

富士山を仙客が来遊し神竜が棲む神聖な山と称え、白扇を逆さまに吊り下げ日本の空高くに懸けたかのようだとたとえている。

出典

新編覆醤集

石川丈山の漢詩文集。正集四巻、続集十六巻。序・目録・年譜、また付録三巻をあわせて二十四巻十四冊。延宝四（一六七六）年刊。丈山没後、門人の石川克によって編刊された。本書は、近世前期を代表する漢詩文集というに値する内容であると高く評価された。しかし一方では、江村北海の「日本詩史」（明和八（一七七一）年刊）において「拙累多くして往々俗習を免れず」と酷評された。本書に先んじて丈山生前に刊行された「覆醤集」（寛文十一（一六七一）年刊）もある。書名の「覆醤」は、「醤油瓶のふたにする紙」の意で、著作の価値を低めて言う。もとは「漢書」揚雄伝に見える。本教科書は、岩波書店「江戸詩人選集　一」（上野洋三著）によった。

構成

第一（起）・二（承）句…富士山には仙人が訪れ、神龍が棲む。（仙山の描写）
第三（転）・四（結）句…雪を絹に、煙を柄にたとえ、富士山を逆さまにした白扇に見立てる。（冬の富士山の美しさに着目した比喩）
〈詩形・押韻・対句〉 詩形―七言絶句。　押韻―「巓（テン）」（第一句）・「淵（エン）」（第二句）・「天（テン）」（第四句）。下平声一・先韻（セン）。
対句―第一句・第二句。

訓読と現代語訳

富士山（ふじさん）

①仙客来り遊ぶ雲外（うんがい）の巓（いただき）
②神竜（しんりょう）棲（す）み老（お）ゆ洞中（どうちゅう）の淵（ふち）
③雪は紈素（がんそ）のごとく煙（けむり）は柄（え）のごとし
④白扇倒（はくせんさかしま）に懸（か）かる東海（とうかい）の天（てん）

富士山

①鶴に乗った仙人も来て遊ぶという、雲の上にまで突き出した山の頂。
②久しく神秘的な竜が棲むという、洞穴の中の深い淵。
③（山を覆う）雪は扇に貼る白い練り絹地のようであり、立ち上る煙は柄のようである。
④まるでこれは、白扇を逆さまに吊り下げ日本の空高くに懸けたかのようである。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 日本漢詩文の歴史を理解する。知技⑵ア
❷ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❸ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❹ 詩の書き下し文を完成させる。知技⑵ウ
❺ 正確に現代語訳する。
❻ 富士山の情景を、比喩を使ってどのように表現しているか考察する。**〔「学習のポイント」1、「言語活動」1〕**
❼ 詩形・押韻について確認する。

❶ 日本漢詩文を通史的に確認する。中国との関係も補足説明する。
【評価】 日本漢詩文と漢文の関係を理解しているか、確認する。
❷ 起句・承句・結句における上四字が下三字の連体修飾になっているように、意味の切れ目と訓読の切れ目に留意させる。
❸ 内容を考えながら丁寧に読むよう指示する。
❹ 数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❺ 難解な語句はほとんどないので、指名読み後、ただちに現代語訳させてもよい。詩の韻律を尊重し、説明的にならない現代語訳を工夫させ、互いに評価し合うなどする。
❻ 江戸時代の漢詩人が抱いた富士山のイメージと、現代において我々が抱くイメージとの相違点と共通点が的確に把握できるように、指導者が補足説明をする。
❼ 押韻している文字に印を付けさせて確認する。

発問例

● 一五四ページ

問 **「仙客」（第一句）、「神竜」（第二句）という語により、富士山にどのようなイメージを加えているか。**

答 元来、神聖な山として崇められていたことに加えて、中国的神仙世界のイメージを加えている。

補 「仙山」（仙人がいるという山）、「仙閣」（仙人が住む楼閣）、「仙楽」（天上の美しい音楽）などの漢語があることにも触れる。

問 **「白扇」にはどのようなイメージがあるか。**

答 きらびやかな装飾を排した純粋な美しさを印象づけるイメージがある。

補 「語句の研究」を参照。

語句の研究

● 一五四ページ

3 仙客　鶴に乗った仙人。鶴そのものの異称でもある。「仙人」とは、人間界を避けて山中に入り、不老不死の術を修行した者。霞や露を食べ、空を飛ぶという。

3 神竜　神秘的な竜。竜は、四つ足、角、長い髭がある想像上の動物。雲を起こし雨を降らせ、春分には天に昇り、秋分には淵に隠れるという。縁起のよい動物とされる。富士山には洞穴があって、不思議な霊力のある竜が棲みついていると信じられていた。

4 紈素　扇に貼る白い練り絹地。

4 煙　「煙」は普通は「靄（もや）」の意で用いられるが、当時の富士山は火山活動を行っており、白い煙を吐いていたので、ここでは、けむり、の意にとってよい。ちなみに宝永の大噴火（一七〇七年）は、石川丈山が没して三十五年後である。また、富士山頂に湧き昇る「雲気」であるとする説もある。

4 柄　扇には団扇のように柄はないが、ここでは特に立ち昇る煙を柄に見立てている。

4 白扇　古代中国における扇は円形の「団扇」であり、折畳み型の扇子は平安時代の日本で作られ、その後、中国に輸出されて中国でも作られるようになったとされる。丈山は唐詩を手本としたが、『全唐詩』に「白扇」の語は一例しかなく（温庭筠「西陵道士茶歌」の「仙翁白扇霜鳥翎」）、仙人との関係は示唆されるものの、直接の典拠とは言えず、白い羽毛で作った団扇と考えたほうが自然である。むしろここでは丈山の生活の身近にあった白扇を比喩に用いたところに興趣があろう。なお室町中期の禅僧万里集九には「（上杉）管領顕定、就二夜遊之座一、出二白扇一需レ賛、即席援レ筆」（管領の上杉顕定が夜宴の坐で白扇を出して詩賛を求めたので即座に筆を執る）と題した詩に「一柄威風八州定」の句があり（「梅花無尽蔵」巻二）、武人が白扇を携え、時に詩を書きつける習いがあったことがうかがえる。また五山僧の詩に扇面に書かれたものも多い。そうした文脈を考慮に入れるならば、結句の「白扇」は、かつて武人であり、いま詩人である丈山にふさわしい比喩とも言え、逆さまの白扇は書きつけるべき詩を促していると言えるかもしれない。

4 東海天　「東海」は東方の海上にある国の意から、日本の異称。

鑑賞

しばしば日本のシンボルとされる富士山を、江戸時代初期の漢詩人である石川丈山が、その文雅な感性で描写した詩である。日本古典文学においても、富士山は神聖な山として、またその形状の美しさなどが讃えられてきた。この詩では、それに加えて中国的神仙世界の要素を盛り込み、元来神聖な山とされていた富士山を、より具体的に「仙山」としてのイメージを付加することに成功している。第一・二句における神仙的要素から一転して、第三・四句では「扇」の形状との類似という身近な要素を取り上げて、富士山の美しさを描写していく。第四句では、「白扇」が「逆さまに吊り下げ日本の空高くに懸けたかのようだ。」という端的な比喩表現で締めくくる。その素朴さが、いかにも富士山の威光を讃えるにふさわしい表現となっているともいえよう。誰もが知っている富士山であるからこそ、詩で表現する場合には難しさが伴うはずである。しかし、漢詩の持つ観念的要素と比喩表現を巧みに組み合わせることで、印象深い表現に至った作ということができるであろう。

なお、東海上に蓬萊山という仙山があるという中国の伝説のイメージをここで利用していること、「語句の研究」に述べたような「白扇」の文脈があることにも留意しておきたい。

烏児塞宮

成島 柳北

作者

成島柳北

天保八（一八三七）年～明治十七（一八八四）年。幕末から明治初期にかけての漢詩人・随筆家・ジャーナリスト。名は惟弘。字は保民。幕府の奥儒者の家に生まれ、幼時から家学を受けて詩文を善くし、将軍家定・家茂の侍講となった。また幕末に外国奉行・会計副総裁として活躍した。維新後は野に下り、向島に隠居し、時世から離れた生活を楽しんだが、明治五（一八七二）年欧米に外遊、帰国後は朝野新聞の社長となり、在野の輿論を代表する存在となった。政府の言論弾圧の犠牲となり、投獄されたこともある。明治十年には、漢詩文、和歌、随筆などを載せる文芸誌「花月新誌」を創刊して、多くの文人の寄稿を集めた。

柳北は文明開化へと向かう一方の時勢に批判的態度をとり、批評性の高い漢文の奇文・戯文を得意とした。「柳橋新誌」「京猫一斑」などの代表作があり、永井荷風などに大きな影響を与えた。柳北の号は、柳原（神田川沿いの堤の名。隅田川に流入する手前にあり、柳橋はそこにかかっていた）の北に居をかまえたことによる。

出典

航西日乗

成島柳北が明治五年から外遊したさいに書かれた日記体の欧米旅行記。明治十四年から十七年まで「花月新誌」に連載。もと漢文で書かれたものを連載にあたって訓読体に改めたと思われる。明治初年の知識人による西洋文明体験記として重要であるのみならず、旅行中に書かれた漢詩を多く載せ、西洋の事物を題材とした漢詩の広がりを示す点でも貴重である。その漢詩は「柳北詩鈔」（博文館、一八九四）にも収録される。本教科書は、「柳北詩鈔」を底本とする岩波書店「江戸詩人選集　十」（日野龍夫）によった。「航西日乗」所載とは若干の異同がある。

主題

パリ郊外のヴェルサイユ宮殿を訪れ、過去の栄華をしのびつつ、いまはただガラス窓の向こうに夕陽が照るだけと感慨にふける。

構成

第一（起）・二（承）句…かつてフランスの皇帝がこの離宮を訪れ、后姫と睦まじく歌ったことに思いを馳せる。（歴史の追想）

第三（転）句…その場にあった調度品などはもとのままだが、宮殿の主人はもういない。（懐古の情）

第四（結）句…あたかも日暮れどき、ガラス窓には夕日の光が照り映えている。（感慨と情景）

〈詩形・押韻・対句〉 詩形―七言絶句。　押韻―「過（カ）」（第一句）・「歌（カ）」（第二句）・「多（タ）」（第四句）。下平声五・歌韻（カ）。

訓読と現代語訳

①想ふ曽て鳳輦幾回か過り
②来りて淑姫と長く晤歌せしを
③錦帳依然たるも人見えず
④玻璃窓外夕陽多し

① 思えばかつて王や皇帝がこの離宮をいくたびも訪れ、
② 美しき王妃たちとともに歌い楽しんだのであった。
③ 錦のとばりは当時のままだが、ここにいた人は誰もいない。
④ ガラス窓の外には、夕陽の光があふれ照り映えている。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 作詩の背景について確認する。
❷ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❸ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❹ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❺ 正確に現代語訳するとともに、その内容も理解する。
❻「鳳輦」「淑姫」「錦帳」が漢文では何を連想させるか、考える。〔**学習のポイント** 1〕
❼ 西洋的な要素がこの詩に見られるか、見られるとすればそれによってどのような効果があるか、考える。〔**言語活動** 1〕
❽ 詩の主題となる感情（感慨）はどのようなものか、考える。〔**言葉と表現** 1〕
❾ 詩形・押韻について確認する。

❶「作者」「出典」等も参照して、明治初年に文明開化のための欧米視察がさかんに行われたことを確認する。
❷ 意味の切れ目と訓読の切れ目に留意させる。
❸ 内容を考えながら丁寧に読むよう指示する。
❹ 数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❺ 前半が二句でひとまとまりの文となっていることに留意する。
❻ 漢和辞典を使って語彙を調べさせ、西洋の皇帝や后妃を中国的な措辞で表現することの意味に気づかせる。
❼ 異国情緒を示すような表現について、西域を描いた詩（「涼州詞」）と比較させる。
❽ 懐古や詠史を主題とする文学作品を思い起こさせる（例えば百人一首の「ももしきや古き軒端のしのぶにも」などを取り上げてもよい）。
❾ 押韻している文字に印を付けさせて確認する。

■ まとめ

学習活動のポイント

❶【日本漢詩】の詩について、まとめの学習活動を行う。
知技(1)ア・ウ　(2)ア・イ、思表判B(1)イ・ウ・エ　主態

〔言語活動 1〕

ア 漢詩の表現を日本にふさわしいものにする工夫について考える。

イ 漢詩の表現を西洋にふさわしいものにする工夫について考える。

ウ 同時に、漢詩としての普遍的な表現がどちらの詩にも含まれていることを確認する。

ア…最後に「東海天」で締めくくることで、富士山が日本を象徴する名山であることを示している。一方で、古代中国の蓬萊山伝説を意識していることを確認するため、辞書や事典などで蓬萊や蓬萊山を調べさせるなどの活動をしてもよい。

イ…ヴェルサイユ宮殿の「鏡の回廊」（「鏡の間」とも。庭園に面した側に大きなガラス窓が並び、反対側に鏡が埋めこまれた回廊）について、インターネットや世界史の参考書などで、その歴史や様子を確認させる。柳北がヴェルサイユ宮殿を訪れた前年の一八七一年には、普仏戦争に勝利したドイツがここでウィルヘルム一世の戴冠式を挙行していた。

ウ…「富士山」については、目前の情景を仙界に見立てたり、仙界への憧憬をうたうことが漢詩の伝統的なモチーフであることを説明し、その上に「白扇」という印象的なイメージで真っ白な冬の富士山を重ねていることに目を向けさせる。「烏児塞宮」では、歴史を振り返ってその栄枯盛衰や有為転変を述べて自己の感慨を示すことが漢詩の伝統的なモチーフであることを説明し、「烏児塞宮」がそうした様式を踏まえつつ、西洋の宮殿ならではの光景と歴史を読者に想像させていることに留意させる。

【評価】 それぞれの学習活動について、詩の内容をもとに的確に解釈しているか、ノートや提出物などにより確認する。

発問例

● 一五四ページ

問 **「鳳輦」（第一句）とは実際には何を指しているか。**

答 王や皇帝が乗る馬車。

補 「語句の研究」の「鳳輦」の項を参照。

問 **「淑姫」「晤歌」（第二句）は『詩経』の句を用いているが、どのような効果があるか。**

答 未知の西洋の王や皇帝を既知の中国の王や皇帝のイメージを通して理解させる効果がある。

補 たとえば、ナポレオンとマリー・アントワネットを玄宗と楊貴妃にたとえて、その運命と悲劇を理解しやすいようにする効果がある。「語句の研究」参照。

問 **「人不レ見（エ）」（第三句）の「人」とは誰か。**

答 **補** 当時ここにいたフランスの皇帝や后妃たち。歴史上の人物と広くとることもできるが、「錦帳」は「航西日乗」に「帝ノ后妃ヲ迎ヘ給ヒタル室ニハ錦帳繡褥燦爛タリ」（「鑑賞」を参照）とあり、それと対比してのことだから、皇帝と后妃をまずは念頭においているとしてよいだろう。

問 **「夕陽多（シ）」（第四句）とはどういうことか。**

答 大きなガラス窓いっぱいに夕日の光が溢れているさま。

語句の研究

● 一五四ページ

6 烏児塞宮　ヴェルサイユ宮殿。ルイ十四世によってパリ郊外に建てられた。「学習活動のポイント」の「まとめ」にも記したように、ヴェルサイユ宮殿は現在のように完全に観光地化されてはおらず、なお歴史の舞台であった。

7 鳳輦　天子の乗る車。鳳輦には仙人が乗る車という意味もあるが、ここではむしろ皇帝のイメージが強いであろう。日本では天皇が乗る輿のことで、人が担いだが、中国では乗り物全般を指す。皇帝が乗っていた馬車は、宮殿内の馬車博物館に蔵され、柳北は実見している（「鑑賞」参照）。

8 来　「航西日乗」では「来」を「好」とし、「よし」と読んでいる。そうであれば軽い肯定の感動詞になるが、起句と承句の間に切れ目が生じてしまい、かといって対偶にもならず、やや落ち着かない。

8 淑姫　しとやかで美しい妃（きさき）。次項参照。

8 晤歌　顔を合わせて歌う。『詩経』「東門之池（とうもんしち）」に「彼美（ヒビ）淑姫、可（ベシ）二与晤歌（ゴヲトモニスベシ）一」とある。ここで『詩経』の句を用いることで、漢詩のフィルターを通して西洋の歴史を理解しようとしている。明治初年の西洋理解は、まず中国などの既知の歴史や事物を通じて、未知の西洋文明を理解しようとする方法が主流であった。

9 錦帳　錦のとばり。宮殿にかかる豪華なカーテンをこのように表現した。具体的には、「指導上の注意点」にも記したように、王妃の寝室のそれと思われる。

9 依然　もとのまま、往時のまま。現代日本語では「依然として」のように副詞的に用いられることが多いが、ここは「依然たり」と読み、「錦帳」と「人」、「依然」と「不レ見」が対比され、もとのままここにある、ということ。

9 不レ見　「航西日乗」は「見」を「在」とするが、「見」のほうがより感覚的で感慨を導きやすいだろう。

10 玻璃　ガラス。ヴェルサイユ宮殿の豪華さの一つに大きなガラス窓の多用がある。この「玻璃窓」が必ずしも「鏡の回廊」のそれを指すわけではないが、宮殿のどこであれ、ガラス窓に光があふれる様子はやはり象徴的な情景であったと考えられる。江戸時代ではガラス窓は輸入品で、一般には普

問 詩形・押韻を調べよ。

答 「構成」参照。

及しておらず、ましてヴェルサイユ宮殿のような巨大な建築物に用いられたガラス窓の壮麗さは、柳北を驚かせたであろう。明治以降も、洋館などではガラス窓が用いられ、生産も始まったが、本格的な普及となると、関東大震災以降だとするのが通説である。つまり、この「玻璃窓」は西洋文明の象徴でもある。

鑑賞

「烏児塞宮」は詩そのものとしては特別な名詩とは言えないかもしれないが、西洋の事物に初めて直に触れた日本人が、漢詩というフィルターを通してその文明を受容したことの重要性に鑑み、明治期にさかんに作られた海外渡航詩の中では、形も整っていてイメージも明確であることから、採用した。また、成島柳北という人物について知る機会もあってよいと考える。

前半は『詩経』の典故を用いつつ、まるで「長恨歌」の世界を髣髴とさせるような言葉づかいで進められ、転句において過去への懐古の情が高まっても、なお伝統的な漢詩の枠内にあると言える。ただ、「鳳輦」も「錦帳」も漢詩に使われて不思議のない語彙であるが、じつは柳北が実見したものであるところに、柳北のような知識人が西洋文物をどのように知覚／受容したかが示されている。

結句に「玻璃窓」を置いて西洋の宮殿の壮麗さを一気に読者に印象づけ、また「夕陽」が李商隠の「登二楽遊原一」の「夕陽無限好」を連想させるように、ただの夕陽ではなく、歴史的時間の推移をも示す働きがあることを利用して締めくくるのは、おそらくはその場であらあら成ったと思われるこの詩にも、さすがに漢詩に習熟した柳北の安定感が見られると評価してよいであろう。以下、参考のために「航西日乗」の記事を「海外見聞集」（新日本古典文学大系明治篇）から引用する。ヴェルサイユの庭から吹上御苑を思い起こして感慨にふけるところなどは、旧幕臣として明治政府には出仕しなかった柳北ならではであり、この詩にもいささか反映するところがあると解してよいかもしれない。なお、注釈や解説については同書もしくは井田進也校注「幕末維新パリ見聞記」を参照されたい。

（明治五年十一月）十一日木曜晴　［…］一時廿五分ノ汽車ニ乗リセイヌ河ノ上流ヲ渡リ［…］二時ウエルサイユニ達ス　此地ニハ国会有リ　大統領チエル君モ此ニ居ラル　「トリアノ」宮ヲ観ル　宮ハ路易十六世ノ居リ給ヒシ処ニテ那破侖第一世モ亦此宮ニ住マレシコト有リ　宮中ニ路易十四世十五世二王ノ肖像アリ　最モ宏麗ナルハ魯西亜国ヨリ那破侖帝へ贈ラレシ孔雀石ノ大水盤及ビ花瓶燈台也　又同帝ノ読書室有リ臥榻机案其他依然トシテ旧面目ヲ存セリ　帝ノ后妃ヲ迎ヘ給ヒタル室ニハ錦帳繡褥燦爛タリ　人ヲシテ当時ノ事ヲ追想セシム　宮中ニ在ル所ノ時辰器卓子ノ如キ皆宝石ヲ以テ之ヲ造ル　其ノ美ナル驚ク可シ　又車輿ヲ蔵スルノ処有リ　那破侖帝ノ駕セシ車及ビ那破侖第三世ノ大婚ニ用ヒシ車路易十五世十六世ノ車等馬具ニ至ル迄尽ク具ハル　一トシテ荘麗ナラザル無シ　此宮ノ内園ハ甚ダ我ガ旧幕府ノ吹上苑ニ似タリ　覚エズ感愴ノ情ヲ発セリ［…］